

911.3
シ
2

由
珍
抄

芭蕉
集
傳來

一書

子

袖珍抄

連

敏子糸於葉大車

切字之車

ある人よ鳥なく花乃山路のなる

ほこぎんをよなるねあまのなる

津りりなりな紙る砂の松乃雪

さえきりなる澄雪つる春法を

いつもあらん花乃けの葉はうす抱

初雪はなをいん乃葉もなる

雨りりねあまはあまの初雪

ある

ある

ある

ある

ある

ある

ある



秋うわし 露の氷は志のまら
 露の氷は志のまら 本末は朝ほくを
 本とぎた丹の初より結さくはく
 花のうらみあまのいと本春れん
 雪よりも茶もあぢげあり夏乃花
 花のうらみやまのしら志賀は清
 月よりよ本のしとやも乃松を雨
 秋の色をしまうりいさわうえそ
 一とあめのまといり春乃花
 霜残るは雪も色くよせり月松

心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん
 花のうらみ青葉も色き秋乃花
 娘 雪の花青葉もなり月松を風
 此介
 心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん
 心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん
 心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん
 心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん
 心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん

以上

△下知之事

心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん
 心 心あたれ卯乃花月夜かきぎん

つくせ うちつくせ 紅茶じつと新片志ん

すて 日あし歩くところ 社がて雪せん 梅

ふけ ぬけ 菊の花をたまふ乃夏本とら

こなき 出た 禮してさるぐうよふあ乃雪

あふま ころのぬまやふあ花紙春せん

あ じあの 島紙あじあにああ 朝紙

らうせ 見よ かつあ月

太初字近代例用之階我香向之旧出来之例

用旧例之 初字之 文字之世の 文字の内を去り

文字リとは不切

現在子一 夢みんぬふりーほくぎん

来耳子一 夢とよまもてぬくしー 郭と

空

△玄妙之教向之事

松あらーありや雪みーのとせし

水さびー山や雪よりなるがし

月こそーのうらやあかりのくとし

あろふた月やのうらやあかりは

耀輝

耀輝いさくしてのさきし一なるさき
中々光の支えも遠く子孫くさひ
花も子らのあはれさか
耀輝やふにさかぬとちと

己世並に口語して夢さる年の本
何とぞふとけふいさくさ
きとけふ

うらまをさつはきくさ
老の似を
形も下さるるやさきのさきに入

花もさかぬさきさき
勢もさかぬさきさき
年の故物さきさき
体もさかぬさきさき

本志よりやの分刻と云是也とのりは加字と省
現在のりやの字二種んとあり已上二あり又り法
字入るとも也とかなとあるは主妙法教向なり是
にありと云りやのてよとていし

「此のより山法摺巻」一 震震ひ未ん

此教向も主妙と

「此の香よきうえはくも香也向ん

こと主妙法教向なりよしよとて加字たごくと云え
あわ乃字更も主妙乃ゆふ不問い共念とあり也

△大廻之事

あわ乃字とてなるは法とてぐく玉川玉川法

雲雲乃乃ぬ風風かみみららゆゆ杖杖乃乃月

此物字もて加教向とて上下の分刻にあわ乃
とあわ乃下も玉津玉津徳徳とありり法教合紙大廻と云ふ
と云下は存と省同紙法教向なり

△三股切之事 二名切と云

花花ののいいもも柳柳名名鬚鬚然然ととききりり風

いいみみづづももはは津津乃乃松松風風・音音かかんんあ

此教向柳と付津風とくぬと云れた物二つあるとて
又文字もに三股乃切字とあり又峯と音とあ

字とのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ
ニ字切と事

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

又ツとらうとよつをればニ字あるゆより太田茶

△ニ字切之事

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

出後向うらとんともね〜とこまニ字切事なり又

やとびと異二ツ曰茶

△大廻み不減向之事

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

△かゝると不減後向之事

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

「いんのふれ上ニツ有とてあそニ版切とはPTワ

月也あつね候る何をよ今昔

秋也あつね候る何をよ今昔

此向也といひていふ事

此向の字やけとなくと

あつね月也あつね秋也といふ事

あつねはあつね調と

物字にをよ字め候る事

ありをよ字といふ事

△あつね月也あつね秋也

△あつね月也あつね秋也

うき身なりとあつね月也

里人のあつねとあつね

あつねあつねあつね

あつね

誰袖うらあつね

あつねの袖ぞあつね

あつねあつねあつね

あつねあつねあつね

あつねあつねあつね

△あつねあつねあつね

ていひのりなり 此れとりうる字なり

△うらぐらうらぐらハ物字ニ事

△とらふみやの事 △とらふみや

此のなる雲也震也日也

山とていふ事也本はとらふみやとて

此の字はとらふみやとていふ事也

とらふみやとていふ事也

とらふみやとていふ事也

とらふみやとていふ事也

とらふみやとていふ事也

△九やとらふ事

晴のあしやの事

夜よしの事

かりほらふじとていふ事也

是のころの文字より九つちのや乃字也此や

ていふ事也

△ハ乃やの事 △のや

朝法や ほうの路や 春日好也

志賀の浦や 此れ也いなりとていふ事也

川岸や 山松や 山陰や 河橋や 漆江や

いづれや此類のやとてとちよるあや
花をわや 川をわや 山をわや

△七のやと事

△七のやと事

に合のや 又かろん老が世はたあらしん
初や ちの花やあらしんよしきとまらうし
中や 鳥のうま雲や霞は日よりうて
終や かくしんあらしんあらしんあ
ハのや 今かかやあらしんと月よ島
疑のや あしんかやあらしんあらしんあらしん

すこのや あしんかやあらしんあらしんあらしん

いふあや

又文字よりこちわいにはあいのやあらしんあしんかやし
ハあしんかやしんあしんかやしんあしんかやしんあしんかやし
ハあしんかやしんあしんかやしんあしんかやしんあしんかやし

よあしんか

あしんか

あしんか

いしんか

あしんか

あしんか

此一文字初字や

霜あしん あしんか いくれ初字初字し

花をいんもは

霜降りんもねいれ降く杖乃春

あすも新ん雲いじもさくまひり

霜降りん 雲とらん 山とらんをさくまひり

と降るハ不切、花とらん春の雲とらんす

ゆんちり

雲をらん杖乃とさくまひり

のやうみらるたぐいハ不切よと

あうりト雲乃らん杖乃と来来と

雲みふりて乃事之川ハらん川ハと

しもおねとく流あり

△ふてとせじの押字之事

● 雲 雨もなとを杖乃を杖乃

● 六 又よもの眼のめら杖乃を杖乃

● 七 してあみさくしものあつたて

● 八 いはりめあまよとつてあつたて

● 九 無くさる身もあつたて

の上

社よとらとらうあ雲あま杖乃

志りこと入もいげせし花らん

道あ杖乃とらとらうれん

大なることいふはなほなほ又ていふも世にひるなり

こころあはれとふにあはれしては家なるなり

十九てみさをはとふなりはに徳

△55のこころ事

さびしかりにいふはなほなほなほなほなりとて

おのころはなほなほなほなほなほなりとて

春日燈をくらけ都乃あふりきて

大なることいふはなほなほなほなほなほなりとて

ていふこといふはなほなほなほなほなほなりとて

あはれなることいふはなほなほなほなほなほなりとて

△後向ふはなほなほなほなほなほなりとて

△下は梅をなほなほなほなほなほなりとて

水清く振りてなほなほなほなほなほなりとて

大なることいふはなほなほなほなほなほなりとて

うの後向ふはなほなほなほなほなほなりとて

又後向ふはなほなほなほなほなほなりとて

うこういふはなほなほなほなほなほなりとて

て後向ふはなほなほなほなほなほなりとて

△三世のこころ事大なることいふはなほなほなほなりとて

みえりていふはなほなほなほなほなほなりとて

△此の如字みなり辭人としてよみたる事

△現在めしとよみ

「とよみ」 「松」 「み」

△此の如字みなり

△未^ミ来^{ライ}めしとよみ

「とよみ」 「松」 「み」

「とよみ」 「松」 「み」

△此字にたりらず也

△下^シ結^ケ句^クとる事大^{タイ}座^ザに押^{オシ}してとる也

△此の如字みなり

「松」 「み」 「とよみ」 「松」 「み」

「松」 「み」 「とよみ」 「松」 「み」

△此の如字みなり

但をいふ字上ヨリ
十字目に金をたり

△此の如字みなり

「松」 「み」 「とよみ」 「松」 「み」

△此の如字みなり

△此の如字みなり

△此の如字みなり

「松」 「み」 「とよみ」 「松」 「み」

△此の如字みなり

とて身はけをぬくとて寝てくさくさの毒もや
ふとくいと寝るおとと寝字とふと寝くといふ
△ぬる事

天地のえぬのちるぬとちのちるぬ

かやうよとてはぬのちるぬとちのちるぬ
ちるぬのちるぬとちのちるぬとちのちるぬ
ちるぬのちるぬとちのちるぬとちのちるぬ

△ふのぬくとて道あるまぬちやぬ

ぬれとては切らずとて花さぬ拂りぬ

右行

△そとぬくとて花らぬ ちるぬ

月らぬ

ぬれぬとては切らず

△かくぬくとてはきぬ ちるぬ

ぬれ乃類とてちるぬ

△ぬれ合別之事

雪ぬとて道あるに寝ぬとて

雪ぬとて道あるに寝ぬとて

臭いそとぬくとて切らずとて花さぬ

△ふとて切らずとて花さぬ

△一字と云ふ事 引し引し引し

是は和字をくくると云ふ者なり

△一のらんと云ふは活字のなる所なり

物と云ふは字のなる所なり

△明かすといふは字のなる所なり

かきかきと云ふは字のなる所なり

△いふといふは字のなる所なり

此れは字のなる所なり

△事ありといふは字のなる所なり

現在の一文字をばはらぬなり

△おう移らん的事

是れは移らん事なり

おう移らん事なり

不^{しん}好^{ごう}も自然^{しぜん}乃^{なり}真^{まこと}なり

△二字と云ふは二の字をばはらぬ事なり

△一字と云ふは一の字をばはらぬ事なり

よりの事なり

老^{らう}をばはらぬ事なり

子^しをばはらぬ事なり

是れは可^い分^{ぶん}なり

△四字不^ふ同^{どう}と云^いハ系^{けい}向^{むか}糸

松^{しょう}と^と^とある^{ある}に^に風^{ふう}と^と波^{なみ}と^と付^つく

△すこのてふを結^{むす}事

△^おえ^り多^た行^{ぎょう}笑^{わら}結^{むす}△風^{かぜ}○^を結^{むす}と云^いく

△^たく^りと^とる^るお^おく^く結^{むす}△^かん^ん○^ひは^はと^とて

△^ふ同^{どう}は^は袖^{そで}と^とぬ^ぬの^のあ^あを^をそ^そは^はえ^えす^すつ^つる^る向^{むか}たり^り△^かん^んは^は
白^{しろ}い^いと^とあ^あを^をそ^そは^はえ^え向^{むか}たり

△^おお^おり^り多^た事^じた^たが^がう

△^あき^きり^りつ^つる^るお^おゆ^ゆ結^{むす}松^{しょう}を^を舟^{ふね}と^とあ^あて

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

のてあは^あは^はぬ^ぬな^なを^を松^{しょう}結^{むす}が^が船^{ふね}と^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

△^あい^いわ^わく^くと^と一^{いっ}向^{むか}たり^り△^ふね^ねと^とあ^あて^てを^を供^{たも}つ^つた^たす^す

先不手

△ころ一句歌中にあはれ

急げ世て世に別

良顔カミ小置オビてよしさふる程ほどは不ふ當あたり

△見ミ留と之の車くるま

あそびのうたよそふこときく

あそびのうたよそふ牧まぎを多くきく

あそびのうたよそふ漕こぎのうた

あそびのうたよそふ舟ふねのうた

多しは
カミドメ
テフ史
云モノ

く
す
河

ぬ

あそびのうたよそふ

ふ

あそびのうたよそふ

む

あそびのうたよそふ

る

あそびのうたよそふ

あそびのうたよそふ

あそびのうたよそふ

あそびのうたよそふ

あそびのうたよそふ

あそびのうたよそふ

こころしと糸にひきま字なり

△志のぶとらふ向り

わらりも かくす 人おとる

此詞同意みたるあり 日人を志のぶとらふ向

にゆいしと又こころしとゆいしと乃言葉もはさそ

△かもとらふり △このいとありは事

およそねも糸は電はともあかり

けむかよとらりしこころしと事いひのよりと

定まぬ事いひのよりと

はらゆる糸は流しとねり

けむいひのよりとらりしとるいとおあは乃奇と

て有^て別^別

△むいふも

すいよ^{すい}や長井乃流しは

小糸さ人志あはば作はとや

けさく^けいひふ^いふ^ふなり

△かさ糸又た又とらふ

●重又 又なると糸はけとる 鹿は

●枕又 又もねね糸とおもはとらふ

△成り^成り^り糖乃入る^入る^る詞とる^とる^る

いづらうもりらなるる春解ふ

△八字付系

いづらうもりらなるる春解ふ

△皮肉骨に連弁

いづらうもりらなるる春解ふ

・上皮

いづらうもりらなるる春解ふ

・肉付

いづらうもりらなるる春解ふ

・骨付

いづらうもりらなるる春解ふ

△真草行の連弁

真

いづらうもりらなるる春解ふ

いづらうもりらなるる春解ふ

いづらうもりらなるる春解ふ

いづらうもりらなるる春解ふ

いづらうもりらなるる春解ふ

廿七

園のの雪ふをさるを乃る者をくて

大さうらう合さうぶ行とさ

△大し直ちゆう奉ほう行かう一い年ねんのいゆよて肯其まをた

一いなるまゝころま

△おお弁べんここととほほままきき弁べん

「多たねねをうららんんああままののはは

世よ中ちゆうハハ藤ふじよよととはは忠ちゆう先せんのの泪なみだとと

あめぬらぬるまのさむいふのちゆうくちをさく
ちゆうち世縁はうらとて

「秋あき風かぜよよももととああ乃の世よををて

△私わににりりるる縁ゆかりハハおおととととととててととははははららぬぬわわをを

△弁べんののりりががここのの縁ゆかりななりりととああののりりががららぬぬわわをを
おとととてやゆとてあはれんぬ

△おおねね連れん弁べん

「おおららいいととをを終つひにに後のちににおおららいいて

「塚つかののちちうう生う由ゆににああのの奉ほう年ねんののちちうう

△おおねねままきき弁べん

「奉ほうのの指さしぬぬかかららりりららしし

「くくままねねははははりりままととままをを生うぶぶんん

「おおねねのの指さしぬぬかかららりりららしし
いさねがけいをさうりぬあま

△ 初句 逢奇

田霧をさへ渡家より秋まはるこ
干酒は松酒をうり志はこらへ

△ 異形 通射

のうはさくらとさうりもなうり
駒よふ草は枯葉み鴨ありき

△ おしげてふと

このねは秋をうりおく秋はあ
めは秋をを秋をうりおく

△ きりてふと

きんこのもねは秋ののなうり
霧くき夕のふ乃雨やうり

△ のちのちてふと

本はとうりばふなうりおとあ
おのちのちてふと

△ あうりてふと

又あはるの家を風乃春
松陰乃あるこはさの夕はうり

△ 和奇 逢白

ひびくふねはあうりおとあ

系

川崎とありとありは...
川崎乃ありとありは...
川崎乃ありとありは...

川崎人よ...
川崎人よ...
川崎人よ...

系

川崎乃ありとありは...
川崎乃ありとありは...
川崎乃ありとありは...

△川崎とありとありは...

天文廿四年二月二日

宗牧判

宗養判

長慶朝臣

△好修理右大臣長慶

△史書

遠近なるに初と奉

かくとある人も...
かくとある人も...
かくとある人も...

△は...の知字...
△は...の知字...
△は...の知字...

老...の...
老...の...
老...の...

△は...の知字...
△は...の知字...
△は...の知字...

表...の...
表...の...
表...の...

△は...の知字...
△は...の知字...
△は...の知字...

△は...の知字...
△は...の知字...
△は...の知字...

△は...の知字...
△は...の知字...
△は...の知字...

△秀句とはく字

身とあるものまで草花香の香

心すくことなは切つりつらげて春と云まてあや
人いつぬよもぎの庭よはぬゆりて

△活字のむす
雨のこの本は葉もくさし月お水

△七文字曲

花は後をねばさつづねお葉は
あつ地よあをさつづねお葉は



虫紙

葉紙

宗加

もろ紙

左判

袖珍抄紙

